

峯図幅を送り届けた。主人の喜びが手にとるように私の心の中にひろがっていた。

私は地理の教師として長年地図を相手にしてきたが、教壇でこれほど心のあたたまったことも無いし、教わる方もこれほど意欲的になったことが無いようである。教壇では何かが欠けている。何かに甘えているのか。私は肉迫するものを求めて得られぬ40年の不毛を恥しく思っている。

私の初めての女子学生たち

別 技 篤 彦

今ならどの大学でも女子学生の姿はめずらしいものではないが戦前ではそうではなく、教えるほうでも女子学生を受持った経験のある先生はめったになかったろう。戦時中私は地理調査のためジャワに派遣されていたが、戦争の末期、それまで戦争によって閉鎖されていたジャワの高等教育機関を再開されるに当り、日本人の先生を何人か加える計画がなされ、私も本職の外にジャカルタ女高師の教授を兼任して学生を教える命令を受けた。私にとって女性を教えるのは初めてのことであり、しかも異民族のそれなので、最初の時間はひどく緊張して教壇に立ったものである。私の担当したのは専攻科の学生10名であった。講義はインドネシア語でやったが英語やドイツ語の単語もちゃんぽんに混ぜて、われながら心臓だったと思うが、それでもみな熱心にノートをとっていたところを見ると、どうにか判ってくれたらしい。ところが最初の時間からノートもとらず、机に頬づえをついて私をじっと観察している娘があった。10人の中では最もしっかりした娘だという印象をうけた。彼女は私の講義が終ると立ち上り、日本のジャワ占領の目的、戦時中における日本の女子労働の実態、その他およそ地理に関係のない質問をあびせて私をだいぶあわてさせたものである。

その後も私がインドネシアの国土の美しさやその魅力などについて話していると、いきなり、「先生！ だから私たちは困るのです。そうしたことで外国人が次々に私たちの国にやってきた歴史を考えると、何か我慢できない感じがあるのです。この気持お判りでしょうか」とあびせてきたものだ。私ははっとした。豊かな自然、無限の資源の可能性などをもつゆえに絶えず外国に植民地化され、今も他人の戦争の中にまきこまれてしまっているインドネシア民族の悩みがはつきり理解できたからである。私は彼女たちがかわいそうでならなかった。ほんとうにインドネシア人の身になってその心持を理解しなければならぬことを今さらのように思い知らされたのだった。

私はそれから彼女たちと胸襟を開いていろんなことを語りあうようになった。授業は講義よりゼミ的なもの、互の考えの交換の場のようになり、私はそれを通してインドネシア人の考え方について実にいろいろの事を教えられたのである。何より若い学生たちの反植民地主義の強い感情には目を見張らされるばかりであった。私と彼女たちとのつきあいは1年足らずで終わった。それは1945

年7月の夏休みが来たからである。そして敗戦の予感のあった私は、最後の授業のあと、彼女たち10名とホテル・デス・インデスでしばしのお別れのパーティをやった。何もしらぬ彼女たちは9月にはまた村落調査のレポートを提出する約束をしてくれたのだが――。

広島に原子爆弾が落されたのはその後間もなくであった。私はこうして最初の女子学生たちと別れた。しかしクラスのリーダーだったあのしっかりした学生――その名をスパルティマという――今はインドネシア厚生省の婦人局長として活躍している。私は今も教壇に立つたびに私の最初の女子学生、あのインドネシアの若い女性たちの姿がほうふつとして心に浮んでくるのである。

日本の近くの土地

保 柳 睦 葵

このあいだ(6月上旬)、長野県の松代へ行って、例の地震の情勢を見聞してきました。弘化4年の善光寺地震では、私の本籍がある町は全滅し、私の2代前の人々もみんな死亡したという前歴がある地帯だから、そういう大地震にならなければよいかと心配してです。地震観測所でいろいろな資料を見せてもらったり、話を聞いても、結局は原因がつかめない。だから将来の予想もできない、というのが結論です。これが現代の学問の限度ですが、現代の地震学がこんな程度であることが世間の人々にわかってきたことは、よいことだと思います。学問の限度を越して、勝手な評論をする学者が多い世の中だからです。一つわかったおもしろいことは、100年以上も経った古い家の方が強く、新式のきれいな家の方にかえてあぶない例が少なくないことです。善光寺地震にも耐えた家へ行って調べてみたら、お隣りのモダンな家の方がずっと危険なことがわかりました。これでは何が技術の進歩かわかりませんが、中米や南米で、マーヤやインカの建造物はビクともしていないのに、近代のものが地震で破壊されているのと同じ例は、身近かな日本にもありそうなことです。学問も、見かけは現代的で派手だが、いざとなったら吹き飛んでしまうような土台のない観念論ではいけないと思います。

土台といえは日本の地理学の発達に対しても、近くに地理的研究が空白な土地が残されていることは許されません。ところが現実には、朝鮮半島、中国本土、台湾の地理を研究している人が何人いることでしょうか。安易な評論や観念論をやる人はいるようですが、地味な具体的研究はどうでしょうか。現代の中国では、学者は観念論などはやっておらずに、みんな真剣に専門の分野で具体的研究と取り組んでいます。これは中国の学術雑誌をみれば明らかです。地理学では、自然環境およびこれを構成する諸要素についての研究は大変なものです。これも認識しないで日本では、学問の限度もわきまえないジャーナリスティックな観念論で済ませていることは許されません。